審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　渡 辺　　真 弓

本論文は16世紀のヴェネツィアにおける都市景観の完成過程と、その過程に貢献した建築家たちの活動および建築作品についての研究をまとめたものである。

ヴェネツィアは中世を通して航海貿易で繁栄していたが、1453年のコンスタンティノープル陥落を機にオスマン・トルコと対峙することになり、また15世紀末の地理上の大発見以来、物流通経路が変化したことで、貿易一辺倒だった経済基盤が崩れて行く。すでに15世紀初頭までにヴェネツィアはテッラ・フェルマ（本土）の諸都市とその領土を支配下に治め、領域国家となっていたが、その本土側に土地を購入し、農園経営を始める動きが16世紀には顕著にみられた。貿易商人であったヴェネツィア貴族が土地所有者となって行ったのである。

16世紀のヴェネツィアを代表する建築家としては、J・サンソヴィーノ（Jacopo Sansovino, 1486-1570）をあげる場合が多いが、ここでは本土側との結びつきが強いアンドレア・パラーディオ（Andrea Palladio, 1507-1580）を中心に据え、他の建築家たちの活動とあわせて論じている。

［序章 ヴェネツィア共和国の十六世紀］は、導入部である。パラーディオはパドヴァに生まれ、十代半ばでヴィチェンツァに移り住んでから、建築家として大成する。ヴィチェンツァにはバジリカを始め幾つもののパラッツォ（邸館建築）を設計し、同時に田園のヴィラも数多く手がけた。しかし彼は共和国の首都ヴェネツィアに入り込むため、ヴェネツィアのカナル・グランデ（大運河）の中心に位置するリアルト橋建て替え計画のコンペが1556年に行なわれた時、それに応募した。

［ I章 「リアルト橋」をめぐって］では、リアルト橋の老朽化に伴って行なわれたコンペに応募したパラーディオの案、その後の習作などについても分析している。この時のコンペでは誰の案も受け入れられず、パラーディオは第２案を後に自著『建築四書』（1570年）に掲載したことで、時空を超えた影響を及ぼすことになる。18世紀の英国ではパラーディオ様式のカントリーハウスに付随する風景庭園の中にパラーディアン・ブリッジと呼ばれる橋が生まれるきっかけとなり、また18世紀のヴェネツィアの景観画家はパラーディオのリアルト橋を描き込んだ架空のヴェネツィア風景を描いた。また『建築四書』の中の橋に関する章を手がかりに、普段あまり言及されない彼のエンジニア的な側面に焦点をあてた。パラーディオの死後、1588-91年にアントニオ・ダ・ポンテの設計によって石造のリアルト橋が建設されるが、この橋とパラーディオ案との比較も行なわれている。

［ II章 16世紀ヴェネツィアにおける「都市改装」］では、前半で主にサン・マルコ広場の海側の景観がサンソヴィーノによって整えられた経緯について詳述し、後半では、サンミケーリの活動、造船所であり軍事施設でもあったアルセナーレの発展の歴史、水利技師サッバディーノが1557年に作成した計画案など、ヴェネツィアのあまり知られていない側面について論じている。

［ III章 パラーディオのヴェネツィア進出］では、パトロンたちとの関係を軸に、パラーディオがヴェネツィアを特別視していた証拠を『建築四書』の記述から導いている。彼はヴェネツィアではパラッツォ設計の機会を与えられなかったが、『建築四書』には幻のパラッツォ計画案とでも呼べるものが２案掲載されており、これらを廻る論議もとりあげた。

［ IV章 ヴェネツィアにおけるパラーディオの初期の仕事］では、パラーディオのヴェネツィアでの最初の大きな宗教建築となったカリタ修道院について詳述している。この建物は19世紀初頭以来、アッカデーミアの施設に転用され、美術学校と美術館が併存していたが、美術学校のほうは2006年に別の16世紀の建物に移転した。いずれも歴史的な建物の改修、転用、活用の例である。

［ V章 ヴェネツィアにおけるパラーディオの主要三作品］では、よく知られた３つの教会建築（サン・フランチェスコ・デッラ・ヴィーニャ、サン・ジョルジョ・マッジョーレ、イル・レデントーレ）をとりあげ、神殿正面の重ね合わせの手法や内部空間の構成など、デザイン的分析を試みており、イル・レデントーレにはイスラム建築の影響が見られるというデボラ・ハワードの新説にも触れている。

［VI章 ヴェネツィアにおけるパラーディオのその他の仕事］では、あまり知られていない２つの小教会、アンリ３世歓迎式典のための仮設の装置、書物の出版などについて述べた。

［VII章 「建築家パラーディオ」とテッラ・フェルマの二つの都市］では、格調高い「古代風」の建築様式に通じた「郷土の建築家」を希求していたヴィチェンツァによってパラーディオが育てられた経緯、彼がパラッツォを設計する際には「都市の装飾」としてという意識が強くあったことなどを分析している。「ポルティコの街」として有名な生地パドヴァは別の方向をたどり、パラーディオを必要としなかったという、２つの都市の比較論の試みでもある。

［ VIII章 ヴェネツィア共和国の建築家たち］は終章として、本論でとりあげた建築家たちそれぞれの貢献についてまとめ、パラーディオの果たした役割については教会建築のデザインにおける革新と後世への影響を指摘し、特にサンソヴィーノとの比較を行なっている。

付録は1617年の、パオロ・グァルドによるパラーディオ伝の翻訳・注解である。

以上の研究は、都市史と建築家論を有機的に総合したものであり、斯界に大きな貢献をなすものである。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。